江戸時代の村と玉川上水の分水

①恋ヶ窪村分水と玉川上水

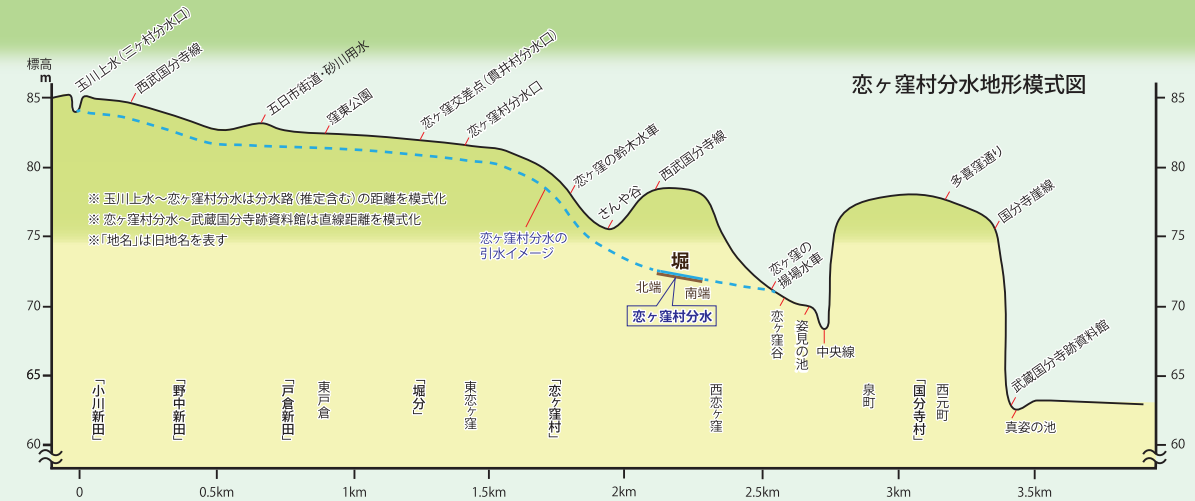
玉川上水は、江戸幕府の公式記録である『上水記』によると人口が増えた江戸に水を流すため、承応（じょうおう）２年（1653）４月から 11 月にかけて開削を行い、承応３年（1654）に通水を開始しました。羽村取水堰（ぜき）から四谷大木戸まで約 43km にわたり、ゆるやかな武蔵野台地上を通す大工事でした。

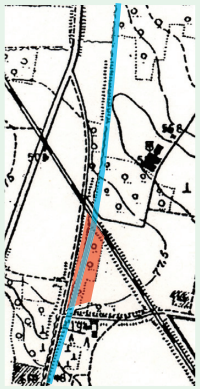
通水から３年後の明暦３年（1657）、国分寺村・恋ヶ窪村・貫井村（現小金井市）が玉川上水から引水することを許可され、三ヶ村合同の分水口が設けられました。この分水は「国分寺村分水」や「国分寺村外二ヶ村組合分水」と呼ばれ、開削当時は小平市上水新町三丁目付近から直接取水していましたが、明治３年（1870）に玉川上水に船を通すため分水口の統廃合が行われた際、南野中新田分水（砂川用水）から引水することになりました。

姿見の池（西恋ヶ窪）付近の水田風景（昭和 33 年）

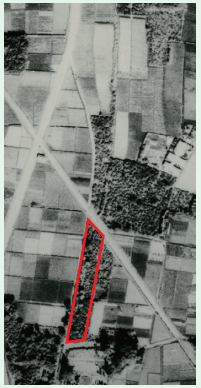
貫井村に分水をしていた恋ヶ窪交差点の東側一帯は現在でも「堀分（ほりわけ）」という地名が残され、水に関わる弁財天が祀られています。分水はさらに南の東恋ヶ窪五丁目交差点の東側から国分寺村と恋ヶ窪村に分かれ、昭和 45 年（1970）頃まで水が流れていたとみられます。姿見の池付近にあたる恋ヶ窪村の流末では田園風景を構成していました。

市内における分水関連図





恋ヶ窪村分水周辺地形図（昭和 30 年）



恋ヶ窪村分水周辺空撮写真（昭和 22 年）

②恋ヶ窪村分水の開削

恋ヶ窪村は、中世には鎌倉街道が通る交通の要衝に位置しており、近世初頭には村が成立していたと考えられます。恋ヶ窪村分水は村の農業用水の確保が目的でしたが、その開削には、さんや谷と恋ヶ窪谷にはさまれた台地をひとつ越えなければなりませんでした。当時、トンネル工法ともいえる胎内（たいない）堀（ぼり）はまだ技術的に確立されておらず、この段丘を通すため大規模に掘り込む必要があったのです。

分水の開削により、恋ヶ窪村は約３斗９升から８斗８升へと倍以上の石高となり、次第に高低差を利用して水車経営をする農家（鈴木水車）などもあらわれました。

③発掘調査と整備公開

平成29年（2017）の緑地整備に伴う発掘調査から、長く空堀の状態で保存されていた恋ヶ窪村分水の堀割（ほりわり）（地面を掘ってつくった水路）の形状は箱薬研（やげん）で、堀幅の上面は約6～9m、深さは約5.2～5.5mを測ることがわかりました。また、当初から玉川上水に匹敵するほどの規模で掘削され、堀の底部から50cmほどの深さまで水が流れていた痕跡を確認しました。通水のため分水として機能していた時期に遡（さかのぼ）る遺物は少なかったものの、江戸時代の植木鉢やすり鉢、陶磁器の皿が数点発見され、空堀となってからはコーラ瓶などが投棄されていました。

調査の結果、恋ヶ窪村分水の大規模な堀割は当時の姿を残す土木遺産として貴重であることから、明暦３年（1657）の開削から360年にあたる平成29年に市重要史跡に指定をし、翌年７月に恋ヶ窪用水路周辺緑地となりました。

④市内を流れる分水・用水

市内には恋ヶ窪村分水以外にも江戸時代中期から多くの分水が設けられました。その代表は五日市街道に並走する南野中新田分水（砂川用水）で、現在でも水の流れや空堀を生活の中で感じることができます。もうひとつ、西町には享保（きょうほう）14年（1729）に開削された中藤新田分水跡が残されています。令和３年に行った中藤新田分水跡の調査では享保期の開渠（かいきょ）と幕末以降の胎内堀が確認され、翌年９月に恋ヶ窪村分水同様に貴重な歴史遺産として、市重要史跡に指定しました。